

二上山だより

二上山雌岳山頂には寒暖計が取り付けられている。ここ数年その目盛りを確認する事が早朝の日課になった。2月7日は-5℃、8日には0℃だったが、9日には一気に10度に跳ね上がった。この日ウグイスの初音を聞いた。他の人は9日に聞いたそうだ。まだ覚束無い、たどたどしい鳴き方が聞く方の微笑をさそっていた。

ところが10日には寒暖計の目盛りは急落し2℃に、そして数日間零下が続き、人間は緩みかけた体をやや縮めながら山道を辿ったが、ウグイスの方はためらいなく歌唱力を高め、山のおちこちでやや整った囀りを響かせるようになってきた。

路傍にスマレが花を開いている。狂い咲きなのだろうか、さきがけなのだろうか。

ツバキ(椿) - 二上山初春の代表格

前々号のサザンカの項でツバキにも触れたが、この花こそ初春の二上山を代表するもの。遊歩道脇の白やピンクなどは植えたものだろうが、山腹の雑木林の中にヤブツバキが沢山自生している。



奈良県御所市に巨勢(こせ)山という300mの山があるが、この地域が古代には巨勢と呼ばれ、万葉集の「巨勢山のつらつら椿つらつらに見つつ思はな 巨勢の春野を(坂門人足)」の歌があるように昔はツバキが数多く見られたのだろう。この近くは今でもツバキが多い。

山野に自生するヤブツバキだけでなく、奈良では園芸品種も多く見られ、大和郡山市の椿寿庵や桜井市の椿山では多様多彩なツバキを見ることができる。

《訂正とお詫び》

前々号で「椿」は「国字」と書きましたが、これは私の早とちりで、漢字でした。訂正してお詫びします。ただ中国の「椿」はツバキとは異なる「チャンチン」というセンダン科の喬木をさし、この木は香りがよく、また寿命が長いので、めでたい樹とされています。長寿を祝う「椿寿」という熟語の「椿」はこのチャンチンのこと。



写真はいずれも二上山で

しかし、椿という字は馴染み深いツバキの姿と共に日本人の中で定着してしまっています。ヴェルディ作の歌劇「椿姫」を中国流に「茶花姫」と言われても、ピンと来ないし、世界的オペラも田舎回りのどたばた芝居の感じになってしまいます。矢張り「椿」はツバキですよね。

なお、冬椿は東北、北陸の日本海側に自生するツバキの仲間、一方寒椿はサザンカの仲間です。

野山の不思議 ⑧

真っ白の植物 ギンリョウソウ

「ふれあい広場」3月号掲載分を編集部の承諾を得て転載し、加筆しました。

写真はギンリョウソウ。高さは8～20センチ。全身が真っ白。幽霊茸とも呼ばれるので、きのこだと思っている人も居そうですが、葉も花もあるれっきとした植物です。イチヤクソウ科ギンリョウソウ属。漢字で銀竜草、銀は白い色により、竜はその姿形を竜の頭部に見立てたもの。中国名は水晶蘭で、この美しいネーミングの方が「ぴったり」という感じですね。但しランの仲間ではありません。



写真は齋藤武男さん

植物は「ごく少数の例外はあるが葉緑素を有して光合成を行い、独立栄養をいとなむ」(広辞苑)ものですが、ギンリョウソウはその「少数の例外」の一つなのです。葉緑体が無く自らは栄養を作りません。ではどうして生活しているのでしょうか。

ギンリョウソウは「腐生植物」と呼ばれ、腐葉土から栄養を摂取していると考えられていましたが、正確には土中の菌類から栄養をもらっているのです。松とマツタケのように、植物と菌類との「共生」は広範に見られ、その多くの場合、菌類は土中のリン酸を取り込んで植物に与え、植物からは栄養分をもらって、互いに助け合っています。

ところがギンリョウソウは、栄養をも菌類からもらっており、菌類は他の植物から得た栄養をギンリョウソウに与えているのです(「進化し続ける植物たち」葛西奈津子著)。

ギンリョウソウは「気前のいいパートナー」を見つけて共生する中で、自らの光合成能力を退化させて、日陰で生活する道を選んだのでしょうね。その生き方は「寄生」とも言うべき省エネの最たるものですが、「ちゃっかりしてるなあ」と思いますね。



ただ、進化の過程で植物が折角身につけた光合成という能力を手放してしまったのは勿体無いとも思うのです。

ところで「真っ白な植物」と書きましたが、花を覗いてみてください。雌しべの先端はきれいなブルーです。また左の写真のようにピンクがかったギンリョウソウもあり、これはこれで魅力的ですね。こちらは九州、四国、中国などに自生しています。

ギンリョウソウは意外と身近にあり、同じ科のイチヤクソウ、シャクジョウソウ等と共に二上山でも見ることが出来ます。

以上 112号